

湊が椅子をギィっと音立てたことで、回想から意識が戻ってくる。  
湊は椅子に背中を預けながら、携帯を弄っていた。

「良樹って、クラスジャークール系って思われてるんだよね。ウケる」

ウケてなさそうな淡々とした声だ。この静かに怒っている状態の湊は、俺を堪らなく興奮させる。

「クラスの皆が知ったら驚くだろうね。あの一匹狼な良樹君が、実はドMのネコだって知ったらさ」

湊は机の上に携帯を置くと、ゆっくりと椅子から立ち上がる。

「僕、帰ろうかな」

ここまで俺を拘束して、微妙に足りない快感を与え続けておきながら帰るつもりなのか。俺は首を必死で横に振った。堪えていた涙が頬を伝う。

「んんー！！」

湊はクスッと笑って、俺の目の前で腰を下ろす。

「良樹さあ……お仕置きなんだから……気持ちよくなっちゃダメでしょ？」

「んんんっ——！！♡♡♡」

湊が遠慮なく俺のチンコを思いっきり掴む。与えられた快感に背中が仰け反り、猿轡の間から唾液が零れ落ちた。

「ねえほらみて。我慢汁で床が汚れちゃったよ？」

ダラダラと滴り落ちた我慢汁が、床に広がっている。拘束を受けた時点で全裸にされており、あられもない姿の全てが湊に見られている。

湊は俺のチンコから手を離すと、指先についた我慢汁を舐めた。

「はぁ……良樹のおちんちん汁美味しいっ……♡」

指先に這う湊の舌を見て、ごくりと息を飲む。

その舌で俺を責めて欲しい。キスしたい。もっと触れて欲しい。

俺の視線に気づいた湊は、優しく微笑む。そして、俺の口についていた猿轡を取った。

我慢していた声が一気に溢れ出る。

「んあっ……ごめ、ごめんっ……」

「何がゴメンなの？」

「いいんちょ、と、話してっ……ごめん、なさいっ……」

「僕が嫉妬したの、嬉しかった？」

「嬉しかったぁ♡♡」

我慢出来ない勃起チンコを湊の膝に擦り付ける。湊の制服に擦れ、全身が快楽で強張る。

そうやって必死に腰を振っていれば、湊が俺にキスをしてきた。

「んふっ……んっ！」

舌が絡み、互いの唾液が混ざり合う。

ずっと求めてたキスが、背中にゾクゾクと快感が走らせる。湊は俺の口内全てを舐めまわした。上顎をなぞり、頬裏を舐め、歯茎を全て辿っていく。

息が出来ない苦しさと気持ちよさの狭間で、俺の目からポロポロと涙が零れ落ちた。

キスをしながら、湊が俺の乳首を摘む。

「ああっ♡♡そこ、やああっ♡♡♡」

「気持ちいい、でしょ？」

「ん、んっ！♡♡気持ちいいっ！！♡♡♡」

乳首が引っ張られた痛みが快楽に変わる。俺の体はもう、湊によって全てが改造されていた。

湊は俺の乳首を弄りながら、今度はキスではなく耳を舐める。

舐めたり、甘噛みしたり。

ジュルジュルと、水音が耳の中に響いてきた。

「み、耳やああ……♡」

あまりの気持ちよさに、膝がガクガクと震える。バイブが突っ込まれているケツマンコは、

腹の奥深くが疼き出していた。

バイブなんかじゃ届かない、もっと奥深くを湊に責めて欲しい。悶えた腰が揺れ動き続ける。

「み、なとお……」

「んー？」

「お願い、後ろっ……」

「後ろがどうしたの？」

「挿れてほしいっ……♡」

腰を左右に振ってアピールする。湊は少し考えたような顔をして、首を横に振った。

「だーめ。お仕置きにならないじゃん」

「やらあああっ……」